W442
N13

工夫雙紙

四

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

工夫雙紙巻四

業名　松治啓江郎平胤禎輯

一　松平但馬守直為此代小枝川喜忠（出石馬号）といふ者
御かけ損しけるとて浪人して二三年を経て直為
の城下（鍋谷大地）川村定右衛門（出石馬号）名にあこ笠乃切まさる
を冠て綴ませ此単物小絶帯あるを乞食来りて
基所の大戸口の夏居りしが此うまて最も淫らた
小家本は通れと言はれとも淫をうたふ定右衛門
中て素の男と業を立させ此居名の刻せ似る

書 13.7.24 国会図
01W50734

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

とくこそ夜九ツ時分定太郎篠倉へ行ゆ殿此下
より引出して切捨て翌朝御所の次第を大目付
此者へ訴へ出れハこそ旨但る守時まし定太郎を感
らましけるとなし 校合雜記
親族なりしハとも、かれ此日分の長太郎討捨
ハ此ハかなんこの去夫こそ旨役人へ至るハさも
有慮しし工夫なり
此頃会小郎ゟきれ此竊小感ある事此
侍らくこそハ載ゆり定太郎の長太郎ハ此

討捨しハ武道の慈悲といふへし此切
てしとも其の一言実に御術中分出て感
ある事侍らかり所を知るハ武士此魂ひ
此心なりんハ一当時ハ恩の大、猿病と言
へし味ふへし
一 黒田籠分守長政此中老相山平波ゟと母里
但馬ゟ言る麗陣以浮水指手と及んとく云云しこそ
越ハ但る 古今ハ 若者の云ゟ別なれハ唐人となり
此中年ハ無りしとて年先行へ此城へ先ハされ誤

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

業の達人なれハ多くハ引をつして家道ハ仕事ふ
ましかしも男かけハ中へ死今相隔つ一しも
思唯とのゝ拳をにきつて扣へ力れ子時但馬殿をかけ
け勢く捲け たゞ景業に家ハと諸人まもり治いたり
傳後ハ甚しき事を志たりと思ふけしきもなくて
但こゝろ三に家こゝろぬ事りまて相もく一渡もの
沙法の張し一向の若輩ものゝ又渡らるの様なれ所
存し家老子傳ありたるものハ万事ゝ有かけるも
ものそ一身を捨る事の高とハいはれまし所高とハ

一命をもかしむましと思ふ中上者も最定思
たる家と思ふ傳ひこなるぞ誰もいひたき事ハ多
ハましとも浮世のならひにて加ふまん仕るそ能分別
して見たへと親の尚さなるものと教訓を掘ひたる
かしも遠おにつゝも度ましに獨りの志り此り
なれハ但馬ハ傳後の恩を流くしと見て涙と流く
と流しけり死後なれハ愚をもつきむく別事の
但るも涙をなのしけるやと思らく是を言て一つ
前もなし 傳後ハ行もえやまれ事をとり

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

智音を世にあれば此ハ此上ハ先服をつかうまつる丹波
と申を取り下は数十年来此ふ奇存御免下されば
り最り入事なれば丹波先へ出らまじかへと唯れば一
庄業の外なる事とよろこふ事張りなし但る所
存の趣申上家を申といなや然前なるを立て庭へ
入られ候る人を法機にんあしきかと笑 笑 是ひ
はるかなるをきハ通しと見へて手をぬくひ
出らまじかいかもさんんよく悦ハれ事重をとし
能州吾行ひ但るまくさられ此通ハ但馬頂戴して此重を

詰くとも申され丹波なる指申べし先へ出るまじかへと
ていうたもなきとさしいまと丹波なる一重のみ事
取付しに一ツと申て指うたる服指を丹波なるをハし
先々能ハ行ひとも先生も能知まじかう業を一
簾よくハ夫ニ身ニ迄腰をたなさしかへとも和睦の心
なりしとて書ハしるこそ留まるかうし思ひ此
脇指を但るまさせんか丹波ハ脇指をみて又ちう欲て
席を見へ合せ為ひるを仮後申れるハ臆しかるかよ
丹波見へ合せハ入るまし但るにさせとて申せんか

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

る所也

一 長島合戦に荒川新八郎といふ者度々の戦ひにつかれて境分なりて水をのこりける時 兜の立物に運ハ天にあり と書たる文字の水にうつりけるをつくと見て 近人を討死しけるとなり

少しおくれたる事のありて心の間にとこつかる和なる事のありしや 実はへし

格物勇猛のいてこそ無ケ条にて 実はへし

一 奥州陣の時武者修行に出たる者をよさ武者にて

数度に御あれもの人城責の時 武者ふ中欠出たり 諸人いふ事の事にやと見ゆ居れる所に城中分敵寄出たり 依て此ものを書に 強を合せたり 武功の者気を感じけるとて 名敵の出る事をいりなれ事にて 知りけるとて 華係りけれハ 城に立拭立てる 強一回に知らしと 敵也 たる事を見て 強出したると 強をもたるとや

こやうの事に心付たる事を 場数出ん人のものとなり

いふ 実にへし

一 十河存安と申る我朝との取あひの時 海部定強の

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

まへなりされども治世までハ婦人の義を重ク
されハうやうの事心ニ[illegible]
一 松永彈正ハ三好長原吏ノ局を妻として大和国ニ取
退きしか欲心深く民をむさぼる事を当として
家中ニ出入様者をハ大こうく作らせて柳様を号
して吏を治しては娘を寝ひの板として又
串様の串も大家ニ作らせけり先いうべ下地の為
せんとて打ちこれ事によりて一て弾は毎日のこ
たくこ兵粮玉薬いしかこ及ばれいらゆる物迄もた

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

くわへおくられ所四つの奢りにや札をたてくいるせ
られ松永深山から別見とし城中にたゞ物あり
と思ひし又札を立そへ置し又非ずして中に来る者
所ゝハ鹿臺を所ゝへ入れと書て建へし或時札を立
そへ置こと文に数年の間人民をむさぼりかゝるより
何も深山に多くすべき思ひ但し松永家に事を
欠ものゝ運命し第止しやがてつくへし見をハ
誰をむさぼりて此数所ゝへき所分別ある一
松永深山家へ第数悪百姓とて書たりける云禅に

敵より恵付して味方騒動して前進立ける事
陣に敵を能知りて兵ともをやく打ちて敵に利
を得ら進さりしとし敵より
敵ちかく陣を法なハ人ゝ事も若し月所をもつてをらに
せよ

平城よりハ山城守門かハ櫓とハ此意し更に一
一秀吉明智と山崎に合戦秀吉能地の理を得ひ
し迎勝利となりけるに秀吉無原にあれて上度に
軍の勝敗ハ山崎に天王寺山をたやくれてとれざる

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

よりつゝとめひ堀尾茂助に此下知ありて茂助道を
いそぎ行通しに天王山を着く取切らる所を
見てに山陰へ打出しうしろ天王山の地形の勝者を
見て松田太郎左衛門に申付て天王寺を取らんとし
れども堀尾かゝくに整時に欠る事也そや天王山をハ
茂助鉄炮の打せ様苦にゆくりていきあひ堅きを碎く
ありに明智が人数級軍志りあるとも
天王山ハ名山必勝の地也然る人合戦の者必勝
の時必勝の地必勝の理なるべしハ必勝の事也

いかなる時いかなる地いかなる理必勝と念く
更出くし天王山の事ハ当流言ハ口傳につ
きわきと論せし

一越中大津の板垣刑部城を謙信より攻る所に貴
後河守当方に伏兵を出て城を攻る城其間なれ
ハ巻ほくして引とれ時に城中より寄て出る
後河守ハ是をやこ引ける欲勢勝に出て追来れ
を当方の伏兵起りて是を討城を討出て事ハ引
こもれ後河守又伏兵をれ出て四面に出て攻寄とう

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

まゝ城中より寄て出れ謙信ゟ前れめり引退
城中の者とも前の手仮ハよく知りたりと思ふの
しまゝ謙信ゟ出しく引退して其一騎まで
家来ニ至る輪をうけて城をかゝみて引退し
四方の伏兵たれ一ケ所て引出れ敵兵を見て城
中を引拂ひて退出れまて迷退し合せてたゝひ
多く其時殺し伏兵一手ハ城中へ突込火をかゝ
帯たり一手ハ敵の後を取切て当方ゟ其をとみ立て
討れれハ城中の兵こゝろへ入る一般兵したる

此時大将枝国も生捕しとも
此一段無限味ひ有り寄り二ケ所の伏兵を起を
し時を更さくし謙信ゟ実より矢切者の
大将まで終ゟ謙信以ハ忌れたるも宜なり

一 村川まで謙信里見義弘と合戦の時奥州勢謙信
ゟ加勢したり此時謙信加勢ゟ先陣を相かれるを右
ハ手勢ハ左右を押出る勢といへ所ゟ薬内なれハ謙
信所ハ加勢ゟ先評をさせるものを無好んにおもひ何
かといひ給を謙信ゟ少かひ給ハ其方達ハ加勢ゟ

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

先を頼む事を云念ふなりしと思へとうたれ事し
名主が勢れ観捷といひこそうへ案内を知る事義弘
ハ則逢へ加勢の主級軍せん事こゝろこゝろひなし　其時
二れ同そ云名さへしとこゝろこゝろふかひけるを
加勢れ者きひて二れ同也ハやり立しものをとうを
きけるに也へ義弘を切給し　二れ同もよきまゝにかれ
ひり義弘討死をへこゝろしを椎木小左馬といふもの
義弘と名勢て討死しけるなる義弘のかれたう
とかし

先を云ふ此家拝といふ　更をへし
一　加藤左る助義明の士に辻本左馬といふものなり　なの
辻とひとしきものさまて武功もなきに義明の事に
入室のふを云念に思ひけれ時に大坂陣起りける所
左馬陣羽織に喉時に花れ数ゝ所ゝ疵ともと異まて
書て大坂へ供しけるを心別なる者にて敵の中へ欠入
て首をとり義明に見せ入又欠入て首をとり
義明れ前へ投出し　同れ所ぬやうに事にして何れ論
なしと云捨て義明れ傷を出けるとし

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

残党の附添の族ものとも首尾一つにて
しらしむへしとて噯（アツカヒ）にて事止し
一 慶長四年九月家康公重陽の御祝儀として
大坂へ御越し なされけるに内々御登城なされける
その時前田中納言殿中にて申あひて刺殺し
申へしとの事の討人には浅野弾正長政を申付を
其ほかには大野修理亮治長土方之人々右方に衆
彦三郎といひし時信雄の家臣因幡守といふ
武者のものを討すへき例よりものせて中村みまとし

内府公をは二たひ此支度ありとは御存しなく九月
七日大坂へ御出ありて重陽の御祝儀の御出あるに
諸大名への御ふるまひたしかにきかされける
銘々によつて長束大蔵大輔増田右衛門尉返忠して
よつて右の衆のさたを家康公へしらせける
是によつて九月九日御城を出させ候八日伏見より
京中騒き此事を御きゝなされ家人兵具せさせて
ら御入御登城によつて御なされけるか扇
下の辺に大ひなる鉄の掛の物ありけるを御らん

行つて見ハ今迄此事なき事也 供此
者小見せ 並て 給ひ候ハ しとてそれ供を
の所を百喰也 此所蛇をよく見て 重へと 給ひ候
よりつて 此供此所ハ 分こ所に居る 内に 夷へ女中
を見て 給へ候 秀 粮之 此同見なされ 此事なされ
ハ此供事此所 右此所に 給ひ候 此供 して 御ゆゑ
とも 事行中ハ此事を 志ひ 詰よて 申て 御天し
如何さ 内通此者 行へし と 右ゆゑに 捨ひ候
家康ニ 伏見へ 此御ゆゑ此 之人の 討ひを 事也

る 浅野 深田 事行中へ 行て 此事いふと 右後 ニ
ゆゑに 其東 埼田ハ そら 知らぬ 思ふて 居る 故ニ
其也 心中を 推量して 庶を 立御見へ 下十人
徒 其中 其 其て 家ゆ 町也へ 着して 居よりて
家之 此より 申 之 ゆゑ 此 行事 もなく 甲州 此 所地
へ行て 休 見 給ひ へし と 給出 されハ 事ハ 而
なるとて 右此人数 其て 西に 冥 東 ゆゑ 武 府中
ゆゑて 秀忠ニ 使を もつて 申 之 ゆゑ ハ
内府此 所意に よりて 甲州へ 家ゆ 籠 ゆゑ と 給ひ候

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

楯を取て結ぶ傳令湯ハ人数を引て三丁程引
退きし時分敵を見おてうしまちよふ当る事
なれハおしも強ひ鉄炮を打せられハ敵粗鎗して
進ミ切れそれ陣を勘左衛門人数をまとめ多く
引ける傳令湯の傳へし所より三丁程引退き又
傳へを立てゝ敵又むかくと退其後に傳令湯
さんくに打立れ傳令湯敵粗鎗されハ人数を引
て勘左衛門傳へ分三丁程引退き傳へ終りくして
引取れハ敵喰留る事叶ハ其人の武勇

まて虎口をの事に来りしと巻ひ結ぶよく組
を書ひ鉄炮をよく打せる也と小人数をも傳へ
蒙重なりて引ける也大勢の敵喰留る事なら
さりしとも

探引仕方し傳へ此立方計探引ハ叶
ハぬる時らけし探引の云傳を工夫を一
一大津の宰相京極高居ハ大津の城に楯籠り西方分
攻かれ時或相夜討を一ツ為んと城会も全成しなり
されども豊の軍に味方手負多し言ふ敵是

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

軍なれハ勝利疑しとて座敷ハ出あまされとも
前にて討出んといひしものとも安堵いさ心さし此
者共出て働けとて七人か内を伊賀甲賀の者
手勝放にといふものを案内にして立花左近の
屋形へ忍ひ入けれハ当番の者とも出合けるを七人のもの
の々鎗を揃へつゝおのゝく首を取れハにせを人ハ搦川
計りして見る者なし　よき時分そとて川とつりける
時節を切ぬて夜てとつる跡ハ雲霞ことく
追掛けれとも中々かりとつて入る組なき尾

伊賀甲賀之者ハ大名に咄たりける人まて右の事をいへり
七人つゝ後分れハ出来りけれハつを呼よといへとも
明日当尾立左衛門明よといひけれとつ当番の者とも
大事にてつしそ逃ぬて討死せよと呼る事なりけれハ
立花左衛門いかく同しあきたる者と思ひ居らんて座
敷割りし甲斐もなく何迚人を切て出合ハせさる
そとのゝしれハ欲に大将逃来る迚命を心元なく思ひ
不出して人を城ハ我ら逃れ討死せよと申けり
さハ是非なし討死せんとて走出て呼ハ物せよとて

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

澄元ハ東寺をあさされ給ふ三万騎へ切かけ給へと申けれ
ともる先をかけて左様にて宮せんより給はずらるへき
事また又をまつて給らまじき事ハ今兵余られけれと
常門の家より左様の非儀なしけれをハ猶ら
のむかんと申けれ共ハ同心仕られと申切て居たりける
秀秋被成に申けるハいかて思せられけれと兵兵
せんとてまた大将々の如くなれハ論するに秀秋
もあされ果て居たりける所に村上右京と云
もの進み出松永ん給へしとて三百の陣
に打むかつて給ふ追掛る時をあむやと心得に五馬
差して向敵ハ給て左様の弓箭ハとられとふ本
又四郎のハ向敵に奏放され兵々の宗を取てされけれ
ハに三方よりて攻られ譜ときこへぬ申されやる
と申それハ丈なとこまて三方へ近きかり先かり
よつてやらくと成るに給を依次第居たる衆
北到り遅しと先を出して久出しける
三馬ハ深田中三郎少輔居まて筑前境の城
を取て三後越河大納言殿召され依後

の時本多能登之所能の様にあらて居る筈と号して
五百貫をかなり一生乗人とあらて果れ候とし
楯こしろ此深夜ハ今命しともさしとハ笑へ
きるも楯こしろにつらされハふ義なれ但ハ
へきや更に
一家康公京勝所征伐として冥東所下向此後西方
蜂起の告あるされハ諸將伶俐ありて　家康公
所をうつらへきに憚りハ家をよつて京勝押此所留
六　秀康公を指重へきよりかて　内府公秀康公

一信ハ家ハ大度京勝と以ふ別歌を押へらるへきを
之方も諸士ハ妻子を冥東へ指出て心を安く存へし
之方留守に居る達ハ諸卒安心する事と信ハ
ハれとも横面ハ此大事なれハ此所留守へきの
所満足と思ふ也ハ是非此所を治つるへき迷ハ所
所に本多佐渡守ハ秀康公ハ陣へ余をし
てかハ家ハ此度冥東に而ひて所としよりつらバ上ハ
一戦の要にようて此ハ大利にもなるへきことなれ
是私意を出やきハ事ハ
内府公秀康公

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

一大谷刑部の補之徒明之といふ事を　家康公御東
征の後越前敦賀の城主大谷刑部の補　故右関の
出張人や　頃此ハ武十万石にしか指万石の軍役なり
本国を州の者に今度暴猪戦原につき東西　発
動なりふ大谷思ひ給ハ西郡ともに入魂なれハ和睦の
大侯せんと冥東下而を思ひ立ハ刑部　毋ハ新日の
局といひて大政而此領事に此申張によりて成
響なりて諸大名も跳光したる人に公月　晦日
伏見を立て　二月　二日徳州垂井へ着き廓病なれ

共義引こもれ居なり眼見へさるゆへ身に替
て手を引者に木下山城なとて鎖しこまの大学
をハ岩手にして此内人を同道志けり石田三成ハ
大谷と男色の賢盟なりし　人に大谷の下臣を少
と柏原彦太郎をもつて密談の有もむきを申をし
佐和山へ招きよせて一味の事を頼ゝ給ハ大谷ゆへて
如く見ゆるもなさ思葉のなされ居とに思ひ立し
事なりハ　内府伏見の居のふ時にしうやうよりも
深まれるへき事と冥東へ下り達て関八州の人数

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

をおくる人も　内府より外ハなし　こゝにまた
武功のあれ度しかける無を多くおくるハ誰
なるんと云も　内府なれ　三連殿甲信
の男にて度く手にかけし武功のもの多くは
男にハ　内府ハ父お果ぬれハ一業の男子にても
お遠なく家督をかけしこゝ人とする者武を為しな
むも子孫を思ふ也　先そ此人と思ひ付さらんや
あり其人として人より下度ふ心思したしと
思ふ者ハなし如ふ我より上度ふ並てもおゝ

思ふ人ハ　内府と大国にまゝ給し　位ハ内大臣職
ハ大老と訴れぬく上位兼備の大将なれハ何程思ひ
なふとも叶ひ難し　三方此大勢を粗こゝ也とも行つ
まり勢なれハ一段せ此下知ふ従ふへうらは一勢く
心さしを言ふ事にて　諸事極らさるものも軍を
勝きたるにて勝負を知ると事ハ已にそ此と申
りれハ三成興覚敵になりたるとも何事も申て
も定引なれハ並なるに三方十九万石此才上にて
九千人数を持たるとは自慢せられハ何此

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

おそさやうの心根ある程なるハ景勝退治として
泉康伝見ゟ出馬の義幸にて方領地より五里隔て
三千の人数にて通ひ給ひ九千の人数をもつ
て討んとす何の事かあらんや此ゆうの器をもつ
うかゝと指出へかへして後何かと計り今事
ハ千里の勝道に虎をもたるし居るゝと同しあるべし
志ゆうハ一定負に極り多く此うへハ力なしこゝ百
一命を進むるゝ寔に死水とも事あり人来る
此水を義をもあらんと思ふ病人ハ名を欲せんば

必死と思ふ病人の面めハ名を吞ゆる百一よき事も
あらんかと思ふ然しこゝ如く百に至りの術あり
こゝ方の身を誓らんと思ふ程の事を病人上使
として寄来へ出し此事陣左衛門に思ひ召よし
まて出しなハ　内府對面あるべしこゝ附
利数は手立し内府名物なれ遣ハ行うとハ對面はなし
ひれとも左衛門に仕るへと申ひれハ木村源兵衛かゝ井
源師を上使として出し　ひるまかゝ井池鯉鮒
まて水野和泉守を殺害し　こゝ身ハ塔尾に望

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

忠右衛門は走て御手負也白布にて御腕を御結ひ給
ひて其まゝ走出る名松浦小兵衛の首を給ひ次九兵衛
にも御手つから給ひけり　神君御涙を流し給ひ下賤ハ手負なから
との　上意にて物語きこえけり　其孫子御志在世な
さる事次に井伊兵部少輔直政も手負にて其夫腕を
空穂の車段の下へかけて来る　神君御覧有けれ
は井伊か御目見ニ上意無事ニ手負は如何と御意ありて御盃を
賜のみ御薬なと御自身下されけれは井伊は御いたはりな
されけれは兵部ニ疵を見て御感有る事を頼に来り福島両別

かくて今日の初戦に候ひぬる合戦ありしまゝ筆
おのゝと出しぬるさへも思ひ右之くらいほとも
合戦をせしめは御合戦に勝ちて後小軍をせしめは
とて之されける所別心にて念の入たる事されやすて
は能合戦勢して誰ヶ身といふ事も今に候けよ存
なて何事にても勝者小軍初はうちくはとの挨拶し
見たけれは病を立つ一寸中も何事を出し生しけれは立と見る
存せしとて是を書合戦ハ我まさては左様に心得ひいと
仰られけれは心とて近習の各を諸人の感

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

もいつまでもの妻子心元なく思ひ居れば何のしく妻子無事
の事をはやつ所つて行きもへ居渡しこゝにとりて
勝執を所当申へしと御きゝまはれば御見れ面く
加賀福島をたしめ一同に示さ思ひ居れ名申上てゐん
渡に及ばれたり此時金吾秀秋出ゝまさ候よつて
村越茂助を御使にて召れ候ハ秀秋家ハ御さハ
平島覺藤沼名庄稲葉佐渡之人并山姓四五人
都合廿人計り召連れて出ゝ候脇坂杉木小川赤座
も御礼に出ゝ候秀秋人数実ゝ家より引 記

松尾山に御は敵中の当指掛金に明露にては也へ
山中一面に金器に取かり渡り候 神君ハ御
床几によりて下さきゐひ御對面今日御合力也へ利
運に候ゝ御ゝは向後ハ江戸中納言同前に下ゝと
のことも秀秋殿を地に示さ候ゝては申候へし
こゝ時 神君御意にて治部少居城佐和山を御致
れ候はこゝ表ゝ事 敵人也 御にて ことゝ庄分 出給ゝ
黄門ハ佐和山へ向ゝれたり 相 神君数千の前
御実検ゝ治部少ゝ御場小池村の柵より内の前

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13
ガラス使用

八近首此よし此捉しこと内に金吾此家来笠原
首を無理又吉郎首を取つて持てゝ御前
まで出て此等の笠原ハ生国右州小田原と
小原漢代の者也近年金吾之家を出し
中之ハ家に出ゆくひハ高店に下されハ此笠原ハ
此家之下をしし此石高親しき晩ハ　神君
関此黄川大谷刑部少之陣に行へ此人なされ此宿陣
之中人別の夜中大雨血をなかして此夜皆紀
如し此侯此底中ハ居所なくて山里に宿し

然るに法率兵粮なく此に及ぶ事ハ中々糧の
用意なりて諸事へ出すされ居る所なし成別
に動く金吾一き事此時之何連も　上意に紀を
第を求まりしなるに皆血をそみしかも此
及びし此なれハ何連も同を書きて食しなるに
物々身当場の此本陣へ此陣ハ諸事の恐のよ
なれとも実此黄川の趣ハ此陣つゝさる事ハ当場
此陣ハ退散したる歌詠皆大垣又ハ佐和山へ引
退くし黄川に此陣也に返る事なりさる也

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用

国立国会図書館　工夫双紙 W442-N13

ガラス使用